亀中だより

No.31　令和7年12月5日　文責　岡田

人生のグラフは現在99%、残り1%は もっといいことがあるかもしれないから…

亀山中学校「いのちの日」講演会 UD アドバイザー　中川桃子さん

壮絶とも思える人生をさらりと話す中川桃子さんが、本校に来てくれたのは11月25日、今年の「いのちの日講演会」でした。人はどうしたらこんなに強くなれるのか、過酷とも思える試練を受け入れて、前に進むことができるのか、そんなことを考えさせられる講演会でした。私もこれまでに何度かお会いし、お話を聞かせてもらう機会がありましたが、いつも驚かされるのは、その“エネルギーと明るさ”です。二度の白血病との闘い、そして白血病による失明を経験した彼女からは「失明」という言葉とは裏腹な「明るさ」が伝わってきます。“桃子さんに会うということは、元気をもらうことに等しい”と、いつも感じさせてもらいます。

進行役を務めた本校職員の永田先生とは、お住まいもお隣同士で、幼少期から家族ぐるみのおつきあいをしてきた間柄でした。永田先生は昨年から本校の人権教育担当を務め、今回の「いのちの日講演会」に際して、桃子さんの生き方をどうしても中学生のみんなに知ってほしい、桃子さんの生きざまから、感じ取ってほしいと考え、この講演が実現しました。11

中川桃子さん（左）と進行役の永田先生

「もう生きることを終わりにしたい！…」

講演の中で桃子さんがさらりと、でも確かに放った一言でした。人は必要な情報の8割を目から得ているとか。これだけのエネルギーを持った桃子さんでさえも、やはり視力を失うことは受け入れがたい出来事であり、絶望の淵にいたそうです。

では、桃子さんはどのようにして、この絶望から立ち直ったのでしょうか。桃子さんは、一度目の発症は国家試験や卒業試験の直前、夢に描いた看護師への道を実現させるという強い思いが自分を奮い立たせていたと話してくれました。そして二度目の発症時、失明という現実も目の当たりにしたとき、彼女を救ったのは、家族であり、友人だったとのことでした。以前と変わらない接し方に安心感を得ながら、街の中で出会う人の親切にも触れ、その小さな積み重ねが新たな自分をスタートさせる推進力となったそうです。そんな桃子さんは最後に中学生へのメッセージをくれました。

「みんなの人生でも、不公平や理不尽を感じたり、どん底にいるような気持ちや絶望感を味わうこともあるでしょう。

でも、私が、目が見えなくてもこうして元気に過ごしている姿、それがみんなの次の一歩につながれば幸せです」

11

「いのちの日」の学びは日常の生活の中に…

11

桃子さんの人生のグラフは、現在99%だそうです。講演後に聞いた話では、失明がわかったころは当然ながら「0どころかマイナスだった」とのことでした。今の生活に十分満足していると話す桃子さんが、1%を残したのは、「今よりももっといいことがあるかもしれない」という理由からでした。桃子さんならたやすくこの“1%の未来”を手に入れるんだろうなと、思えてしまいます。ただそれは桃子さんのバイタリティのなせる業であって、私たちは考えないといけません。世の中が合理化され、機械化されていく中で、逆に生きづらさを感じる人もいるんだということを。スーパーに行けばセルフレジが、レストランではタッチパネルのタブレットが…。きわめて便利な世の中と一見することができます。ただそれはまだ、「誰もが暮らしやすい社会」を実現しているとはいえなさそうです。このことをクリアにする手立てはいまのところ、人と人とのコミュニケーションだといえます。街中でヘルプマークを付けた人や白杖をついた人がいたら、あなたはどうしますか。「お手伝いしましょうか」という一言を持ち歩いていたいものですね。